

## 日本原記 続編

### 縄文・弥生からやまと時代へ

#### ～邪馬台国と古事記神話との接読～



(高千穂町歴史民俗資料館ポスター)

2019年2月20日三水会

野口幹夫

表紙ポスターの文言

日向國風土記(知鋪郷)  
日向の國の風土記に曰はく、  
白杵の郡の内、知鋪の郷。  
天津彦々火瓊々杵尊、天の  
磐座を離れ、天の八重雲を  
排けて、後威の道別き道別  
きて、日向の高千穂の二上  
の峯に天降りましき。時に、  
天暗冥く、夜昼別かず、人  
物道を失ひ、物の色別き難  
たかりき。ここに、土蜘蛛  
名を大鉏・小鉏と曰ふもの  
二人ありて、奏言しく、  
「皇孫の尊、尊の御手以ち  
て、高千穂を抜きて初と爲  
して、四方に投げ散らした  
まはば、必ず閉晴りなむ」  
とまをしき。時に、大鉏等  
の奏ししが如、千穂の稻を  
搓みて初と爲して、投げ散  
らしたまひければ、即ち、  
天閉晴り、日月照り光きき。  
因りて高千穂の二上の峯と  
曰ひき。後の人、改めて知  
鋪と號く。

土蜘蛛(土着の勢力者)

## 承前の序論、日本原記総序と続編の意味

2007年出雲大社を訪ねてその異様なたたずまいに触れてから、8年間、日本各地の神社と縄文遺跡を訪ね回った。北は北海道宗谷岬に民族渡来の足跡を感じ、南は縄文人の言葉を最後まで話していた生き残りかもしれない八丈島まで訪ねた。

まとめてみればそれは日本人のルーツ探しだった。求めていた神社の元型は、縄文人の聖地と弥生人受入れの記念が合わさって生まれたものと結論付けた。これらは3回に分けて三水会に報告し、まとめて日本原記として出版した。その総論をこのように書いた。

私の青年時代は科学的社会主義を信条として、かつ無神論者であった。両親の死をみて以降、宗教に心が向き始め、まず仏教をさまよい歩き、50歳になってイエスに引き合わせてくれた神父に出会い、カトリックの洗礼を受けて現在に至っている。20年にわたってイエスの紹介の講座を教会で勤めている。

そんな私だから、総じて神社や神道には関心が向かなかった。何か時代に取り残された存在のように見ていた。それが2007年出雲大社を参拝したときに、その不思議なユニークさに驚いた。それから8年かけて、神社とその背景の探訪を行った。仏教は書物によって近づき、キリスト教は神父さんという人によって導かれたが、それらとは違うアプローチであった。それは「旅」であった。数年間各地を旅行する中で人と出会い見聞をし、パソコンならではの地理天文技術も使った発見もしていった。

その旅による探索は、思いがけない自分探しとなっていた。つまり「我々日本人とは何か」の原点を探し求めることとなったのである。四度の段階を経て、求めるものにたどり着いたように思う、それを日本原記 一から四として集大成できた。

### (神社と祭り 神社フラクタルの源泉を探る 2009/1/21 三水会発表)

その一は、神社を見ていくとどこも共通の姿をしているが、しかもそれは世界のどこにもない日本固有の存在であることに気づいた。それは必然的に日本固有の歴史である縄文文化にさかのぼるルーツがあることを示唆している。それを探る旅へといざなわれた。

### (縄文の祭り 三内丸山、能登・金沢の遺跡が語るもの 2013/4/17 三水会発表)

その二は、神社のルーツを探して縄文遺跡を訪ねまわり、そこに共通する祭りの装

置を発見した。それは太陽の軌跡である夏至冬至を時とし、自然の偉大な存在とを結び付け、そして何よりも祭りとして縄文人の人の間の平和な結びつきを強める装置を作っていたのである。縄文聖地というイメージが湧き出た。

**(縄文と弥生の接点で生まれた日本の神社の起源 2013/4/17 三水会発表)**

その三は、その縄文聖地からいかにして神社に発展したかの過程を探った。そこには日本全土で起きた大事件、縄文から弥生への移行に絡んでいた。そしてその移行が、いかに平和裏に行われたかを知り、そこに日本人の性格を形作ってものが見られることを発見した。

**(日本語のルーツを探る旅 縄文語の名残を話していた人たち 2015/1/21 三水会発表)**

その四は、さらにさかのぼって、縄文以前の石器時代の日本列島で何が起きていたのか、そして学問的にも謎とされている日本語の創出に想像を飛躍させる旅の発見があった。それは縄文語古語を残している八丈島の旅であった。それに稚内を旅していた時、周氷河地帯に出会い、北海道の古代遺跡と日本列島の古代とが結びついたとき、日本語とアイヌ語がつながったのである。

学会的には認められない異端の仮説ではあろうが、何よりも実地を見て回ったということと、未知のままにしておいておいてはいけない必要な仮説であるとの自信を持っている。

これらをまとめて**日本原記**を 2015/6/2 出版した。

今回の報告は、この日本原記 続編として、これまでの日本原記で果たせなかった縄文・弥生からやまと時代への移行の物語、具体的には邪馬台国と古事記神話との接読を目論む。

このテーマは学会的には曖昧模糊の分野で残されている。まず中国古代文献に描かれた日本の弥生時代の国々のうち北九州の国々はほぼ実体とその所在地が判明したが、中核となる邪馬台国に関しては近畿か九州かをめぐって未だ学会では結論が出ていない。

また古事記などの日本神話は、天皇制を支える国民総動員のイデオロギーとしての苦い過去があるため、今は根拠のない物語として軽んじられ、むしろ歴史検証の対象とはされず、真面目に論じられてはいない。これらが曖昧模糊のままとなっている原因だ。

最近、古代研究の手法に、新しい科学的な進展が生まれている。それは遺伝子学である。民族移動の痕跡とその年代推定が遺伝子の特定の部位の追跡で、地球規模でわかるようになったのだ。それもこの20年単位でどんどん進歩して国際学会的に権威あるものとなってきた。まずはその成果を踏まえてこの問題に光をあてたい。

私は神話を形成した伝承の物語は民族の古い記憶に何らかの根拠があると考えている。それに今回挑戦した。日本原記の時と同じく、歴史的現場に行けば何かをつかめると考え、今回はその舞台となった北九州一円に足を運んだ。また周辺国として済州島を旅した。この地を歩くことで、多くの実感的歴史観を得ることができた。表紙に飾ったのは高千穂町歴史民俗資料館で見かけた絵であるが、そのリアルさに一つのヒントをもらった。この論考は次の目次で進めたい。

## 目次

承前の序論、日本原記総序と続編の意味

- 1、DNA分析による日本人ルーツ探しが進展した。その結果の要約
- 2、第1段階の移住者
- 3、第2段階の移住者は長江文明の呉・越の亡命移民
- 4、第3段階の移住者は黄河文明の燕の亡命政権～邪馬台国と記紀神話の接読
- 5、古事記神話の本質
- 6、まとめ
- 7、学会の諸説との比較

文献と注

別添 魏志倭人伝原文と現代文訳（ウイキペディアより）

なおこの論考は「日本の精神風土の形成」の論考につながり、引き続き別稿で詳説する。

## 1、DNA 分析による日本人ルーツ探しが進展した。

人間の体内に刻み込まれたさまざまな生体情報は、その個体にたどり着くまでの長い人類の歴史を記録している。生化学情報を人間ルーツ探索に使う研究が前世紀から始まっていた。その一例は大阪医大の松本秀雄氏の研究で、免疫グロブリンの構造の歴史的变化を解析し、日本人のルーツはバイカル湖湖畔の北方蒙古系民族にあると報告された。(文献1)

2004年には、ひとのDNAの全面解読が達成された。DNAは人間らしさの全情報であるとともに、霊長類からホモサピエンスに発達するまでの長い歴史の記録でもある。人間のルーツ探索にさまざまな切り口で使われた。まず母系遺伝のミトコンドリア遺伝子の追及で、人類は出アフリカの「ミトコンドリア・イブ」からすべてのホモサピエンスが生まれたと報告されて大きな話題となった。この10年位の間に、コンピュータと生化学分析の組み合わせたDNA解読装置が急激に進歩して、数100億円の国家プロジェクトだったのが、今や1万円クラスの費用でだれのDNAでも解読されるようになった。世界中の民族の遺伝子情報が得られたのみならず、遺跡の中から得られた骨から数万年も過去の世代の人類のそれも、得られるようになった。

その知見の中から今回の縄文からヤマトまでのテーマにかかわるものを紹介する。まずY染色体の遺伝変化からの追及(文献2)である。

父系遺伝のY染色体は原則的には人間の共通の配列を持っているが、ある部分には個性的な配列をしたところがありそれが遺伝してある系統のグループが形成されていることがわかった。それをハプログループと呼んでいる。そのグループ形成の分岐時点が歴史を遡って計算できる技術が国際的な協力で2008年に完成した。その結果が次ページの図1である。

人類の出アフリカは3度にわたり、65千年前に出たグループはハプログループDとEで、ユーラシアから日本にまで到達。2度目に出たのは53千年前のCグループでアジアへ、3度目の48千年前のFTグループはヨーロッパに向かったことがわかった。Dから37700年前に分離したD2は後に詳述するが日本列島にほぼ固有で所謂縄文人のイメージである。

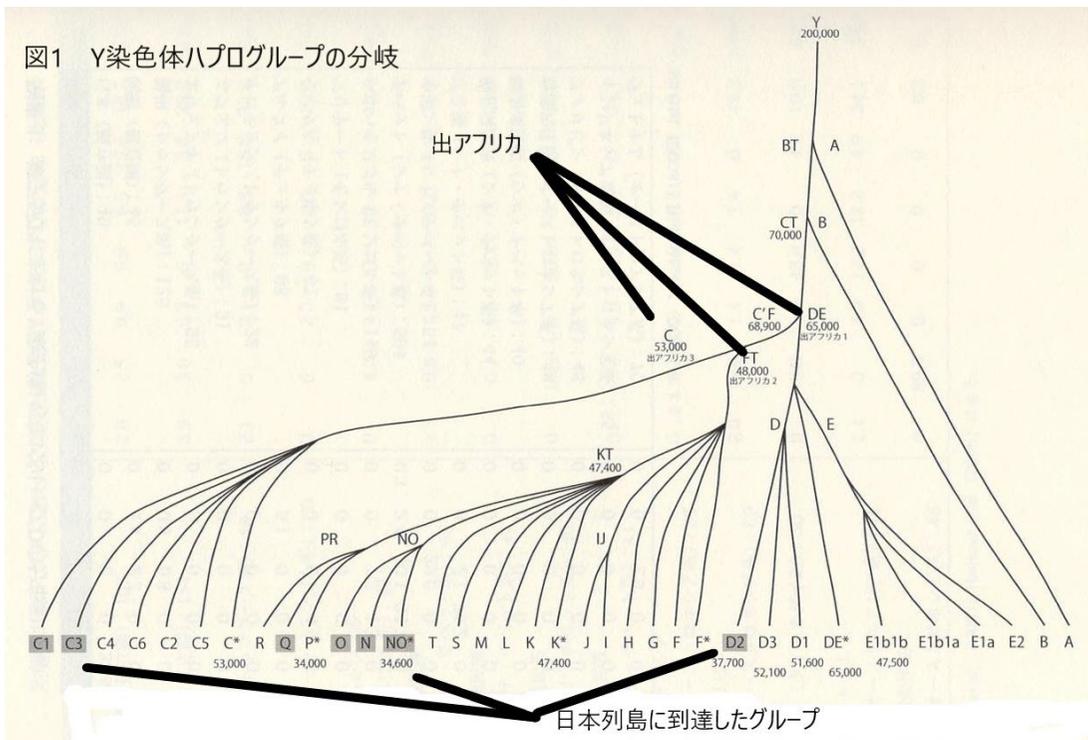


図1 Y染色体ハプログループの分岐（文献1 崎谷満著より）

DNA 分析が簡単にできるようになったため、Y 染色体だけではなく本体 32 億個の DNA 全体を対象とした起源研究が始まった。一つは古墳や遺跡で発掘された古代人骨の DNA を採取し、もう一方で現代人の地域ごとの DNA を直接比較するという方法である。（注1）

切り口は違っても遺伝子からの紀元追及はほぼ同じ結論となっている。それをまとめると、石器時代から縄文弥生時代からヤマトに至る日本列島への人類の移住は3つの段階で起きている。

**第1段階** 4万年前 (第2図)

氷河期日本列島がまだ樺太北海道でまた北九州と中国大陸と地続きとなっていた、北と南より狩猟採集民が入ってきた。九州には D2 北海道へは C3 の遺伝子を持った集団であった。D2 などの記号は Y 染色体ハプログループの名称である。



**第2段階** 4400-3000年前 (第3図)

縄文後期～晩期すでに列島は大陸から分離していたが、海上を活躍する「海の民」が北九州から移住してきた。長江由来の稲作文化を持ってきた。彼らの遺伝子は O2 である。

**第3段階** 3000年前～紀元前後 (第4図)

大陸からの移住。彼らは鉄と武力による社会統一文明を持ってきた。彼らは黄河漢民族と同じ O3 である。



このように3段階に分けて移住した Y 染色体ハプログループは、現代日本人にはっきりと証拠を残している。

分類	日本分布	近隣諸国分布
D2	アイヌ 88 東京 40 九州 28	0
C3	アイヌ 13 東京 2 九州 8	シベリア 80 モンゴル 84 カザフ 74
O2b	アイヌ 0 東京 26 八重山 67	朝鮮 51 ベトナム 14 インドネシア 20
O3	アイヌ 0 東京 14 九州 26	漢北 66 漢南 33 チベット 33 朝鮮 38

D2 はアイヌから琉球人まで日本全土に 30~40%存在するが、他国には存在しない。日本固有種でありめずらしい現象で日本の特異点でもある。

## 2、第 1 段階の移住者

国立遺伝学研究所齊藤成也教授の核 DNA 解析でたどる日本人の源流の中で 2 万年前の日本列島地図があった。その図にはその時代九州は大陸につながっていることを示していた。第 1 段階の人類移動は樺太北海道ルートのほかにも大陸九州ルートがあったことを教えられた。「日本原記」では北ルートのみ注目していたのを改めたい。沖縄に最古の人骨が発見されたり、九州の南部に縄文早期の集落が発見されたことなどが九州ルートの重要さを示している。

日本原記を完成したころ、NHK の番組で「3 万年前の航海」という国立科学博物館の海部陽介氏のプロジェクトを紹介していた。彼が唱える「日本人のルーツは南から渡海して来た」という説を実証しようとする実験であった。この実験は成功しなかったが、海からの渡來說の著書を発行した。この説には賛成できない。渡海技術を探究しても人類の移動を立証したことにならない、人類の移動は技術探究のためではない。ましてや冒険のためでもない。彼らは食の確保のため、狩猟採取の獲物を追って、日本列島が大陸と地続きの部分を通して入ってきたのだ。生きるための必然の結果だ。女子供もいた集団移動だから、安全な陸続きルートを通して来たに違いない。八丈島や、沖縄への移住を危険な原始船で渡海したことは事実だが、それらのケースは、ともに巨大な火山活動で生活の場を失って、南の島影を求めて逃避行した場合だけだと考えている。

また「日本原記」では新石器時代に北海道・本土共通の石器語が創造され、その後北海道の切り離しによってアイヌ語と日本縄文語が分かれたとの仮説を述べた。これも修正が必要のようだ。遺伝子からの研究の方々は日本語の創出は北九州特に長崎周辺と考えておられた。ただ日本語の源流を海外に求めたかつての言語学者の説は支持されていないので、その点では同じ発想である。今後の学際共同研究に期待したい。

### 3、第2段階の移住者は長江文明の呉・越の亡命移民。

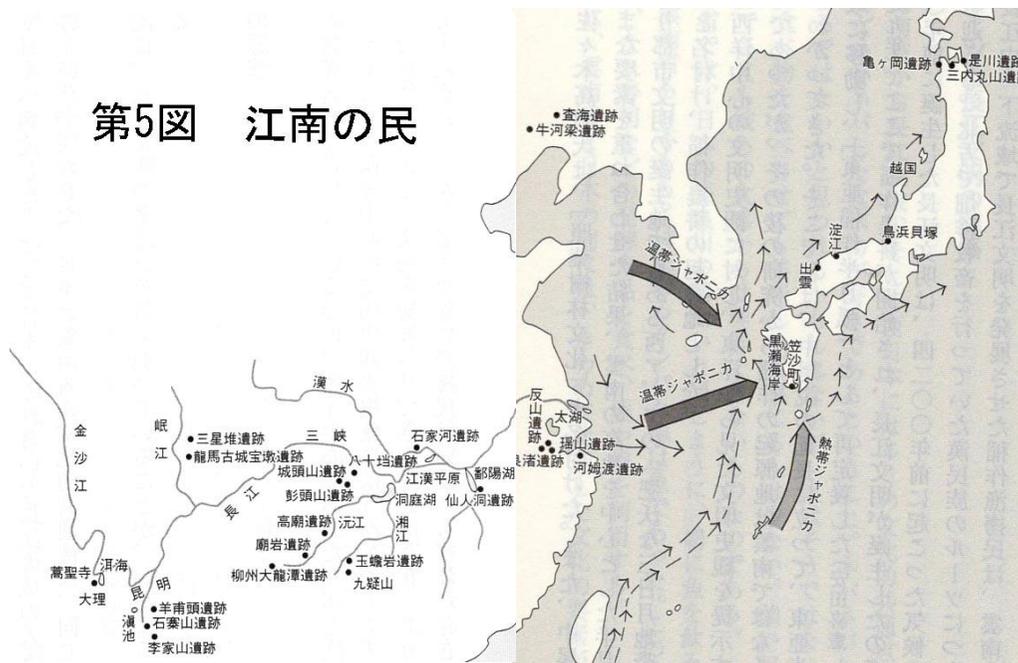
今回のテーマに関係するのは移住第2段階からであり、それを詳しく見ていきたい。第1段階であった4万年前、日本列島は北と南で大陸とつながっていたが、1万6000年前、海面上昇により切り離された。6000年前には縄文海進があり、列島噴火活動が活発な時代を経て日本列島の様相は変わっていった。その間も海上交流はあったが、縄文人相互の移動であって、しばらく列島は外の世界から孤立した状態が続いた。意図的なものではないが、江戸時代の鎖国に等しい状態が続いた。その間の1万年、平和で平等の独特の縄文文化を花開かせた。日本語もこの時期に創出された。世界に他にない遺伝子D2と密接に結びついているとみられる。

鎖国はやがて破られる。原因は中国の事情であった。

日本は縄文の悠々たる安住の中であったが、中国はすでに農耕文明に入り国家の覇権争いと栄枯盛衰を繰り返すようになっていた。中国の王朝は夏・殷・商・周・秦といった黄河文明の都市国家であるが、考古学的に確認されているのは、BC17世紀に成立した殷からだ。彼らは文字を遺したので時間に埋没されずに記録された。

しかし最近の発掘で温暖であった長江流域で生まれた文明が、黄河文明より先に都市国家を作ったと判明してきた。浙江省河姆渡遺跡は7600年前である。長江文明は稲作

第5図 江南の民



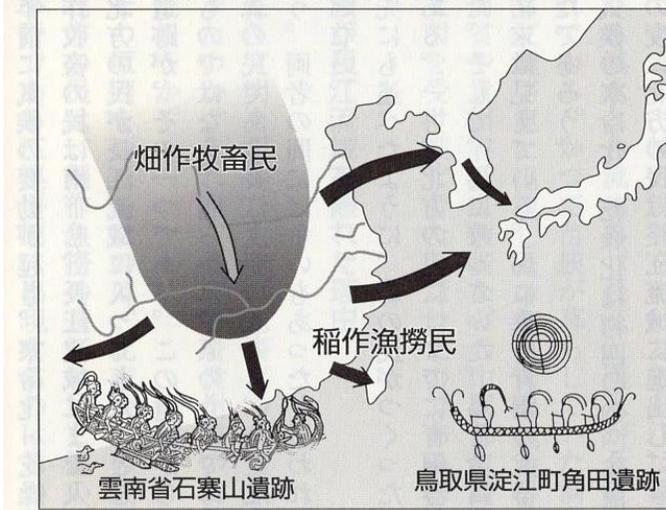
と漁労で生活し、武装権力を作らず、文字ももたなかった。中国の正史に現れるのは、ずっと後の時代になった。ところが日本列島の最初の鎖国を破ったのは彼ら江南長江文明の民であった。

長江文明の担い手たちが中国を離れて日本に移住したのには理由がある。気候の変化が原因だ。長江文明とあまり変わらない時代に北の黄河流域でも文明が起きた。こちらは麦作と牧畜が生活の手段であった。馬を使うために機動性が高かった。青銅器や鉄の金属文化も持ち集中した支配権力を作り上げていった。

長江地帯は稲作と漁労の文明であって、せいぜい祭祀と行政の権力であって侵入に対して防御力は弱かった。

4000年と3000年前に気候の寒冷化があったため、北の黄河文明の北方騎馬国は食を求めて南方に生存圏を広げなければならなくなった。武に対する備えの無い長江文明の稲作民は各地に逃亡した。主力であった苗族は雲南省など南方高地に移動せざるを得なかった。一部は海のかなたへの逃亡的移住となった。

図6 畑作牧畜民の侵入と稲作漁撈民の逃亡



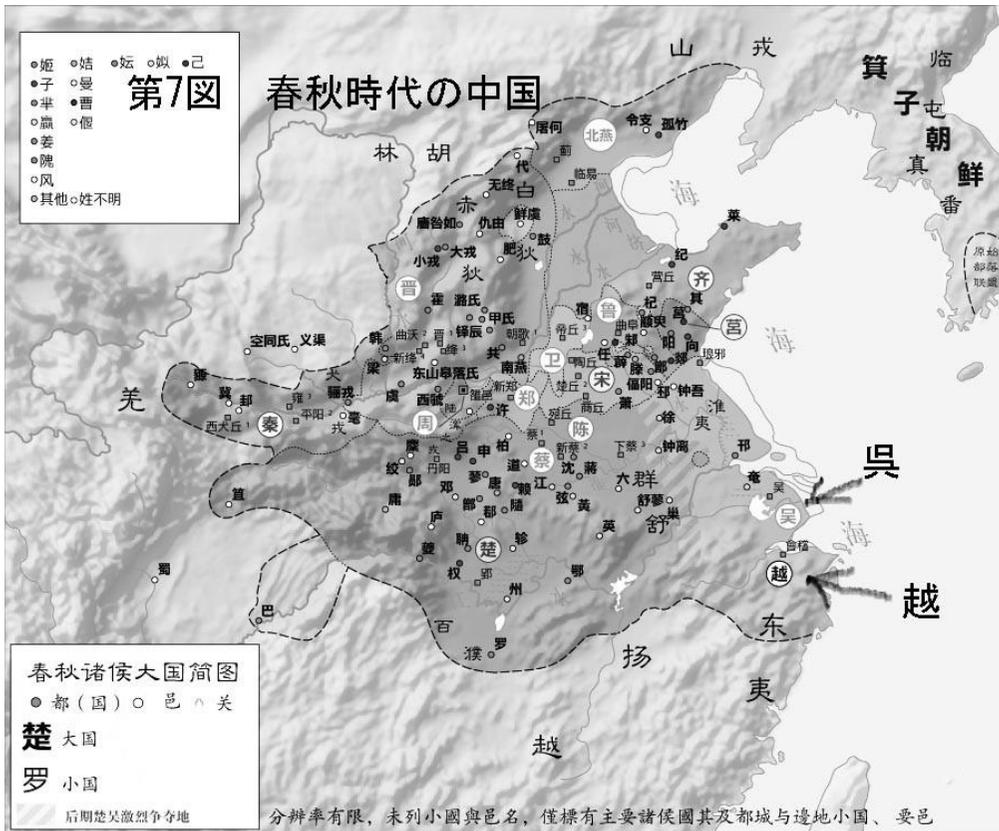
遺伝子分析から解明された第2段階は4400年前から3000年前とされている。遺伝子は江南の民であるO2をもち現代の東京36%九州36%を占める。苗族の遺伝子のO3cはあまり伝わっておらずかろうじて2.0%である。

江南の民でも海に近い民は稲作とともに漁労の民で「海の民」ともいわれていた。生活の手段としての木造船をもち、渡海の技術も持っていた。少数の集団がばらばらと移住してきたことがあったのだろう。BC10世紀以前のことになる。

この逃亡経路には済州島がある。当然ここも移住先となったであろう。

濟州島は海女の国だ。現代も沿岸の家庭で女の子が生まれると子供のころから海女としての訓練を受ける。生計は海女の仕事で稼ぎ出される。立派な海女博物館があり、古来から海女たちは濟州島から朝鮮半島や日本に海女の仕事を伝えていったとされている。また濟州島の国家創生伝説は、島中央にそびえる火山漢拏（ハルラ）山の洞窟に住んでいた原住民の先祖の3人の男が、「三姓穴」から飛び出し狩猟の生活を始めた。そこに東の海から船で3人の女性が稲の種をもって来て結婚して民をなしたという伝説である。日本の古事記には宗像三姉妹の伝説があり、地理的にも近いので、近親感の持てる話である。魏志倭人伝にあるマツラ国は、素潜りで漁をしているとあり、共通の海の民であったことと推定できる。

さらに時代が下がって BC400 年頃のことになるが、中国では春秋と呼ばれる時代に倭国形成に大きな影響を与えた事件が中国南部にあった。呉と越の興亡史である。呉と越は殷・周のような北方漢民族の覇権国ではなく、両方とも長江河口に近い長江文明の国である。この呉越の抗争は人口に膾炙する物語を生んだ。



まず呉の国は、BC12世紀周の王室の流れの太伯なる王子が、周を継がず、南方の野蛮な地方に移り地元の民に迎えられて作ったとの伝説がある。呉と越は隣国同士で同じ民族であるのでライバルで抗争を続け、7代後の王夫差が越王勾践によって紀元前473年滅ぼされた。臥薪嘗胆などの言葉がこの物語の中で生まれている。また中国では「倭は太伯の末」という伝えが残っているように呉と倭はつながっているとみられていた。この呉と越は互いに抗争したが、他から見れば「呉越同舟」と一塊に見られていた。(注2)

一方の越(紀元前600年頃-)は、南方の長江流域の百越に属する民族を主体に建設されたと言われる。呉を滅ぼして一度は中元に覇を唱えるまでに強大になったが、楚の国に紀元前334年滅ぼされた。下の8図に越の民衆の木像と9図に越の持っていた船の模型がある。

民衆は入れ墨をした断髪姿である。またその船は数百人をのせて海洋を乗り切る能力がありそうだ。魏志倭人伝に残された倭人が入れ墨をしていると記載している。また周の貴人が呉の国を樹立した時入れ墨をして江南の文化に合わせたという記述もあった。入れ墨は江南文化のシンボルであった。



8 図



9 図

そして彼らは初めて王侯指導者を擁して亡命移民群として日本列島に亡命してきたとみられる。まず初めは呉の亡命移民であろう。時は呉が滅びた紀元前 473 年の後 BC5 世紀のことであろう。彼らは稲作とすでに鉄の文明を持ってきた。

北九州を通過して山口から北日本に入った。

日本はまだ縄文時代であって狩猟採集の生活をしていたが、この江南の民が初めて稲作りを教えてくれた。彼らを神のように敬い従った。彼らが出雲王国を作り上げたのだ。

前回の日本原記でも述べたようにこの移住民を縄文人たちは尊敬の念をもって受け入れた。彼らを大切にし、縄文人たちの聖地を彼らの住居に奉った。それが縄文聖地と結びついた日本の神社の始まりだとの説を立てた。

北日本の島根を根拠として、2~3 百年かけて北へ南へと展開し、瀬戸内海圏も近畿圏も出雲の指導圏となった。各地に残る大国主を祭る神社がその足跡を物語る。奈良の三輪山も大物主大神が鎮づまる神の山とされているのだ。

呉の亡命移民が、与えた影響は現代日本にその痕跡を残している。まず呉音と呼ばれる漢字の読み方がある。一 二 三 四 五 六 七 八 九 十をイチ ニ サン シ ゴ ロク シチ ハチ クー ジュウと呼ぶのは呉の言葉だ。この数詞の訓読みは他にないので、イチ ニ サンの呉の数え方がそのまま縄文語に取り入れられたという推測が成り立つ。後の漢音ではイーアールサンスーウーリュウチーパーチュウシーであり感じは全く違う。(文献 17 p13)

また絹織物の高級和服は後の世も「呉服」と呼び、粗末な木綿の衣類は太物と区別した。平安以降の豪華な衣は唐衣(からころも)と呼んだ。

遅れて越の国の亡命移民が渡来してきた。紀元前 334 年呉の亡命から 100 年あとだ。彼らは北九州を拠点とし、出雲王国を避けて東北の新潟付近にも植民地を作った越の国の名前が残っている。縄文の民に迎えられた彼らはそれぞれに安泰な小国を作った。

本土中国では引き続き長江文明の民は北の漢民族に圧迫され続けられた。秦と対抗した反骨の詩人屈原は長江の詩人といわれ江南の人だ。(文献 4)

越が滅んだ 100 年後 BC200 年に秦が中国に統一国家を作り始皇帝となる。始皇帝は「東方の三神山に長生不老(不老不死)の霊薬がある」と具申した徐福に、3,000 人の童男童女(若い男女)と百工(多くの技術者)を従えさせ、五穀の種を持って、東方に船出した。徐福が寄港したと記録されている済州島には西帰浦にその記念公園があ

る。また日本各地に彼の足跡が残っている。佐賀市、熊野市、新宮市、出水市、富士吉田市、東京都八丈島、延岡市などが有名である。徐福の伝説が教えることはこの時代 3000 名からなる集団が渡海できて各地に足跡を残せたということであり、それにもかかわらず、記念碑が残されたくらいの一過的事件であり、出雲や越の国のような拠点形成はしなかったのだ。徐福の薬草探しは貿易の立ち寄りであったが、呉や越の亡命移民は元に戻ることもない移住地創成の意図であった違いがある。

この時代になると倭の状況は次々に作られた中国史書によって知ることができる。

すでに弥生時代に入っていた日本列島は、北九州や北日本から徐々に稲作が始まり、組織的な社会が原始的な国々を作り始めていた。吉野ヶ里遺跡にみられるように、環濠で囲んだ孤立集落でそれぞれはばらばらであった。その中でも豊かになった国の中には中国の支配王朝と交流を求めて使者を派遣するところも出てきた。中国の歴史書もその状況を記している。

漢書には周の時代のこととして、「周の時、天下太平にして、倭人来たりて暢草を献ず 越裳は白雉を献じ、倭人は鬯草を貢す。」とあり、江南の越と並べて薬草を献じたことと記している。もっとも古い出来事の記録である。前節で述べた江南の民と結びついた倭国として認識されていたことがわかる。

『漢書』の地理志には「楽浪海中に倭人あり、分ちて百余国と為し、歳時をもつて来たりて献見す」とある。楽浪とは漢に征服された朝鮮の漢植民地である。

『後漢書』「東夷傳」には「建武中元二年（57年）、倭奴国、貢を奉じて朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南界なり。光武賜うに印綬を以てす」

「安帝永初元年（107年）倭国王帥升等、生口 160 人を献じ請見を願う」

最後に有名な魏志倭人伝の『三国志』魏書卷三〇「烏丸鮮卑東夷伝 倭人の条」をそのまま巻末に添付する。ここには北九州の倭の諸国の名前と人口位置関係をまずしるし、その後当時の倭人の風習を観察した記録が続く。牛馬はもたず、貫頭衣を着、入れ墨をしている。長寿で礼儀正しい。弥生時代の階層分化が見られ、目上に合えば拍手してうづくまって敬意を示すなど興味深い。最後に魏との交流が記録されている。

### 3、第3段階の移住者は黄河文明の燕の亡命政権 ～邪馬台国と神話の接読

遺伝子解析では第3段階の移住者はBC1000年前～紀元前後に大陸から来たもので、第2段階の江南の民とは違い、逆に彼らを圧迫し逃亡させた黄河文明の漢民族の一部である。彼らは漢民族がもつ遺伝子グループ O3 を持っていたのである。第2段階の江南の亡命の民よりずっと闘いにたけた文明を持ってきた。

ではそれは誰だろう。勝者が来るわけではないので、北方漢民族の中の敗者であろう。この時代の中国北部は、周が秦に滅ぼされ、すぐ漢に替わり戦国時代になるなど敗者は沢山ある。その中で倭に亡命しそうな敗者がある。秦にBC220に滅ぼされた燕の国の王族だ。

燕とは周王朝の一族が北中国に作った国である。首都は今の北京付近にあった。最盛期は遼東半島から朝鮮北部まで支配した。

人材登用を重んじ「「まず隗より始めよ」との格言を遺した王朝である。(注4)

この燕についてはBC4頃書かれた山海経に「倭は燕に属す。」との記述がある。「蓋国は鉅燕の南、倭の北にあり。倭は燕に属す。」「蓋や鉅燕」は朝鮮半島の国であろう。この意味は不明であるが、これに注目していた我が国の学者はおおい。

燕の王族がはるばる倭国まで亡命しようとした理由はいくつかある。まず彼らが朝鮮半島に最も近いことだ。陸続きで移動していくときの障害が少ない。次に「倭は燕に属す」との歴史書にあった。その根拠は判然としないが、倭が彼らに近いとの意識があった可能性がある。また倭については良い国だという情報が伝わっていたことはこれまでの歴史書にもあるので、亡命先に選びやすかったことなのであろう。



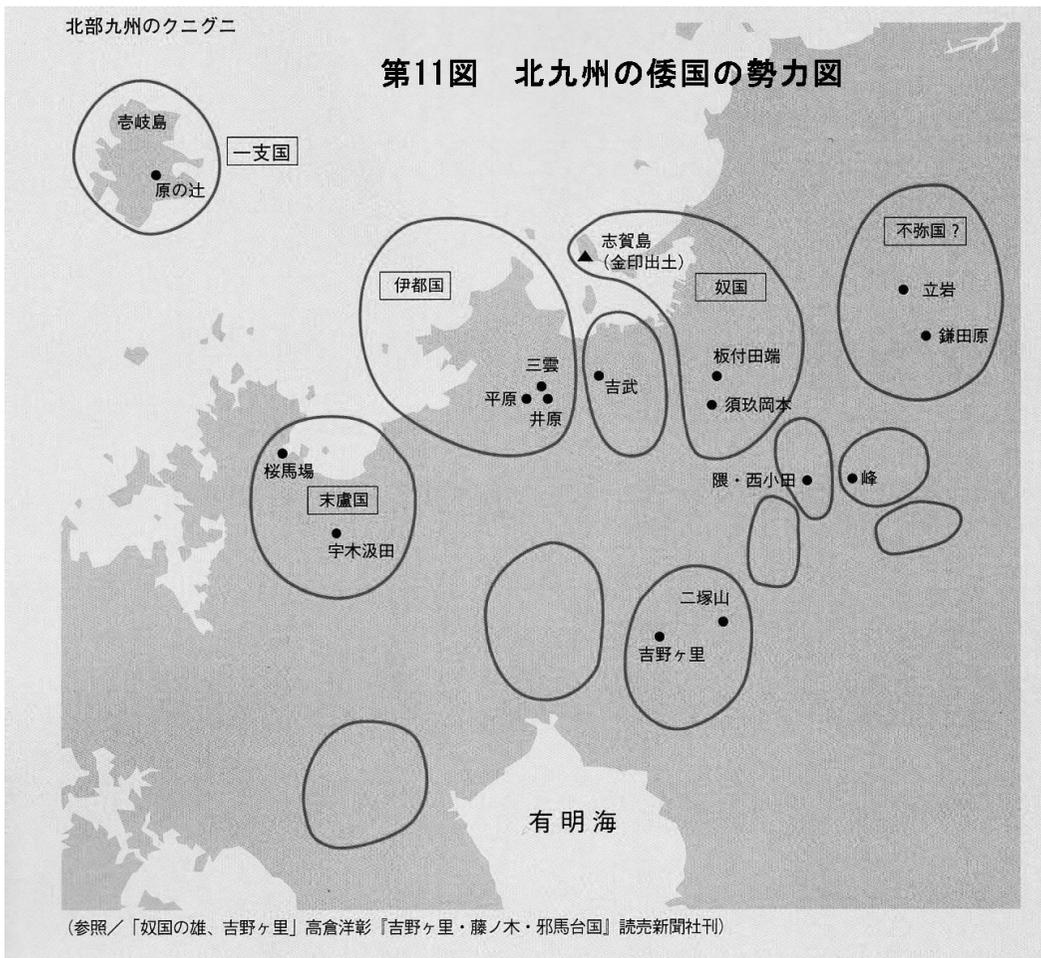
第10図

战国七雄  
頃公元前260年

图例  
■ 秦国地区  
--- 诸侯边境  
○ 古蹟

燕の亡命政権は優秀な人材団であったのだろう。朝鮮半島に逃れながら BC220 年から AD 0 年前後まで世代交代を経ながら、倭国での国家再興の目標でまとまっていた。漢の時代漢民族の前衛地であった楽浪郡（現在の平城）にしばらく滞在したので、倭の情報や言葉を習得する時間はあった。古事記に出てくる高天原での神々の協議は作戦を立てた朝鮮半島でのことかもしれない。やがて楽浪郡は 1 世紀のはじめごろ反乱で戦地となったので、彼らはかねてからの目標国である倭を目指して動き出した。

そのころ倭の国は魏志倭人伝にあるごとく北九州は江南系の海の民の小国群で互いに競争していた。（文献 5） 一支国 末蘆国 伊都国 奴国 不弥国 などは福岡県の沿岸にあって、遺跡の発掘が進み第 11 図のようにそれぞれ位置が確認されている。



これらの国々はすべて江南の出身の指導者が王となっていて、すでに後漢や魏との朝貢関係を結ぶところまでいっていたので、それと紛糾する恐れのある北の漢民族の末裔である燕の王室一行は歓迎されなかった。受け入れられる余地はなかったのだ。

しかし幸い彼らを支援する一族もいた。後の大和神話に道の神 三姉妹としてあがめられた宗像氏である。海の民の頭領であった。対馬海峡に浮かぶ沖ノ島から宗像海岸までを支配下に置いていたこの一族は彼らの上陸を助けた。その助けで、やっと倭国にたどり着けたが、簡単には彼らの亡命王国を樹立することはできなかった。彼らの苦難の行程が始まる。北九州の沿岸から南を眺めると延々と山並みが立ちはだかつて見える。阿蘇の外輪山だ。

彼らはその山の向こうに北九州諸国の支配が及ばない縄文人の大部落があるとの情報を得ていた。そここそ新天地と見定めて、険しい何重もの山越えを進んだ。高千穂の峰を越えたときそこに広い盆地をみた。その山あいの広い盆地で狩猟採集の生活を送っている縄文人の大部落がそこにあった。

山越えを成功した彼らの安堵と喜びを描いたような絵が高千穂歴史資料館に飾ってあった。表紙に使った絵である。2世紀に入っていたころだ。

縄文人たちは、この山を越えてきた一族を迎えた。これまで見たことの無い美しい衣装に身を固め、光り輝く鉄器を持つ姿に驚き、たちまち尊敬の意を表しすべてを捧げ従う姿勢を見せた。表紙裏に掲載した「日向風土記」にはこのように記されている。「天津彦瓊杵尊、天の磐座を離れ、天の八重雲を排けて、陵威の道別き、道別きて、日向の高千穂の二上の峰に天降りましき。時に天暗冥く、夜昼別かず、人物道を失い…ここに土蜘蛛、名を大祖 小祖というもの二人ありて、奏言ししく、「皇孫の尊、尊の御手もちて、稲千穂を抜きて粃となして、四方に投げ散らしたまはば、必ず開晴りなむ」と申しき。…即ち天開晴り、日月照り光きき。…」

後の世に「天孫降臨」として語られる事件だった。土蜘蛛と称された地元の縄文人との出会いも物語っているのだろう。ここから念願の新国の誕生にいたったのであろう。仮にN国と名付けておこう。それは阿蘇の南から西の熊本地方では狗奴国となったのかもしれない。しかし



まだ名前のしれないN国の方が話しを進めやすい。高千穂台地から熊本にかけて力を得たN国は東の日向に降りてきた。2世紀のことになる。

今回北九州を旅行して驚いたのは神話の神であるニニギノミコトの墓が日向に近い延岡市の郊外にあるのを見たことである。

この墓は日向灘を一望できる高台にある。高千穂から日向への道の途中で彼は亡くなったのかもしれない。



日向の隣は当時の北九州諸国最大の邪馬台国であった。宇佐を都として豊の国を卑弥呼なる女王が支配していた。魏に朝貢したのはAD237年3世紀のことである。邪馬

台国はあくまで江南系の国であったので、武力による支配でなく、巫女としての神がかりの支配であった。(文献 6)

N 国の武装集団には敵対できないことを悟った卑弥呼はすぐさま連携関係を結んだ。当時のやり方で、婚姻関係を結び、逆に N 国の母国としたのであろう。それからは、卑弥呼は N 国の最高神として扱われた可能性がある。やがてつくられる神話ではアマテラスと呼ばれるようになる。(注 3)

その連合によって N 国は武と巫術を兼ね備えた無敵の強さを誇り、たちまち北九州諸国を支配下に置いた。海の民も支配下に入り、瀬戸内海海路もすぐ支配下になった。3 世紀のことだ。

最後の相手は出雲王国であった。すでに第 2 段階で述べたように出雲王国は近畿にその拠点を築いていた。三輪山の神が大物主大神で現在も続いている。出雲国も当然のことながら中国の王朝と結びついていた。相手が三国時代の一方の覇国呉の国であった。(文献 7) 同じで呉で紛らわしいがこの二つの呉は時代が異なる。春秋時代の呉越の抗争とその民の亡命があったのは BC300~400 年。三国時代に再度生まれた呉の国は AD1 世紀である。先に逃亡民であった呉の民による出雲王国は、むろん 1 世紀頃の三国時代の呉とも結んだ。この 2 代の呉の影響は出雲王国とともに日本全土におよんでいることは先に述べた。

しかし三国時代の呉も晋に滅ぼされる。魏はまだ健在であった。魏と組んだ九州勢が高姿勢に出る情勢で、N 国を代表とする九州国から国譲りの交渉を持ち掛けられた時、出雲王国はそれに合意し国譲りに合意せざるを得なかった。

しかし部分的には反抗勢力がでた。その闘いは後の世の神話で神武東征として語られるようになる。初戦で痛手を被った N 国軍は、先祖の山越えの威力を覚えていたため、対大和の戦争でも熊野を経て東の山越えで攻め、その威勢で大和を収めた。闘いは部分的であり、交渉で統一を勝ち取ったのである。

N 国は晴れて檜原の宮でヤマトの国の建国を宣言したのである。3 世紀の末になっていた。日本列島に初めてのヤマト統一国家が成立したのである。この政権は、紆余曲折はあっても他国からの侵略を見ることなく継続した。7 世紀に自分たちの国家形成の物語を天孫降臨神話として古事記日本書紀にまとめ上げたのだ。(注 4)

## 5、古事記神話の本質

古事記は、天孫族によるヤマト国支配の正当性を打ち出すために、神話の物語から初

め、当時の現世に生きる天皇までの継続性を書いたものである。古事記が書かれた時代、天孫族による大和国支配が揺るぎのないところに来たので、それを中国のように史記として正統性を主張しなかったのであるが、神話の積み重ねで物語る筋書きは、無理が多く当時も荒唐無稽感がぬぐえなかったのではないだろうか。

天孫族によって支配を確立するまでには、数多くの支援者の協力があり、それを得つつも幾多の苦労があったことは歴史的事実で、そのポイントポイントで忘れがたい事件があり、支援者の手柄への感謝の記録の意味もあって、数多くの事件の記憶が神話として語り継がれてきたのであろう。

一方集められた神話的エピソードはバラバラにあったので、それを一つのシナリオにつなぎ合わせたので、順序は混乱している。例えば出雲神話が天孫族国に先立って語られるのは史実としてもあっているが、その古事記では国譲りが終わった後に天孫降臨、神武東征が出てくる。これはおそらく順序は逆で、天孫族の支配確立のための闘争の中で、最大の相手国であった出雲国の国譲りが行われたはずである。それでこそ初めて統一ヤマト国が出現するのが順序だ。

歴史の事実である天孫族の出現からヤマト制覇までのエピソードを古事記から拾い揚げて時の流れの順に並べてみよう。

古事記項目	内容	該当する歴史項目
活躍する神々の出現	いざなぎのみそぎ「竺紫の日向の橘の小門の阿波岐原に坐して、禊ぎ祓ひたまひき。 アマテラスとスサノオができる	北九州地方に江南より稲作文明がもたらされ、結果国々と支配者が出来始めた。
出雲国成立	素戔嗚尊が乱暴のため地上に放逐され、出雲地方におり、その子孫の大国主が出雲国を支配する。	北九州の諸国からはみ出した一族が山口から北に進み出雲国を作る。
天孫降臨の失敗	アメノホヒアメノワカヒコなど何度も着地を試みるも失敗。	いよいよ天孫族の北九州上陸を図るが、失踪
宗像三姉妹	アマテラスとスサノオの確執の中で宗像三姉妹が生まれる。	天孫族の上陸を助ける支援者登場。海の支配者
山彦海彦の	海幸彦・山幸彦の兄弟喧嘩で山幸	天孫族は上陸したが海の王国

戦い	彦が勝利する	群は受け入れないので、山越えをして縄文族を味方にする
天孫降臨の 実行	ニニギノミコトは猿田彦の出迎えを得て5人の部下と筑紫の日向の高千穂の降臨	高千穂の山越えをし、そこに縄文族が迎えた。
高千穂の宮	日子穗穗手見命は、高千穂の宮に伍佰捌拾歳坐しき	高千穂の宮から勢力を拡大していった。狗奴国かもしれない
神武の東征 の発想	神武とその兄が高千穂宮で相談「何れの地に坐さば、平らけく天の下の政を聞こしめさむ。なほ東に行かむと思ふ」	力をつけた天孫国は全国制覇の意図をもって高千穂から日向に降りた。
宇佐	豊国の宇沙に到りましし時、その土人、名は宇沙都比古・宇沙都比売の二人、足一騰宮を作りて、大御饗献りき。	豊の国宇佐は邪馬台国卑弥呼の国、たちまち同盟、アマテラス神話が生まれた。また北九州地区の最強国となった。
神武北九州 制覇	筑紫の岡田宮に一年坐しき。またその国より上り幸でまして、阿岐国の多祁理宮に七年坐しき。またその国より遷り上り幸でまして、吉備の高島宮に八年坐しき。	筑紫に回った。不弥国・奴国・伊都国・末蘆国と江南系の諸国が並んでいるが、これらの国を次々調略していった。さらに四国と岡山瀬戸内海を制覇した。
出雲国譲り	天津国の使いタケミカズチの要求に対し、大国主その子たちは此の国は「天つ神の御子に立奉らむ。」	出雲国も交渉で戦わずして、天孫族に主権を譲った。
奈良制覇	安芸に七年吉備に八年浪速に来てナガスネヒコに攻められ熊野から山下りで奈良大阪を攻略	天孫族の内紛に悩まされたが北九州連合軍の神武が勝利
大和朝廷誕生	イワレビコは久米兵と共に各地を回り、大和の地を平定すると奈良県の橿原に宮を置いた。そして辛酉年の春正月に『初代 神武天	天孫族が天皇として支配を確立した。

## 6、まとめ

まとめてみると大胆な仮説を立てることができたものだとおもう。遺伝子調査の結果は冷静な歴史的事実を示しているが、それを成り立たせた人間群の動きは、自然現象ではない。また難破船の漂着のようなバラバラの出来事の積み重ねでもない。歴史を動かした熱い思いを持った人間集団がいたはずだ。それを率いていった卓越した指導者がいたはずだ。彼らの願いを発生させた事情が存在する筈だ。

遺伝子調査がしめす諸民族の動きとその時系列を、実際の歴史的事件とを克明に対照させていけば、ごく自然に物語が浮かび上がってきたのだ。神話として語られた日本列島内部の物語と、先進国であった中国の歴史書の記述、そして遺伝子の語ること、その3点がスムーズに結び付けることそれができたのが今回の結果だ。

縄文の眠りを最初に起こしたのが、江南文明の呉と越の敗北者移民集団であったことは幸いであった。彼らは征服を目指してきたわけではない。だから縄文人は彼らを歓迎しその高い文化を尊敬し受け入れたのだ。

なぜか我々は呉や越のことを、なぜか親密に感じる。たとえば呉服は高級和服と承知していたり、ライバル同士が一緒に席に居合わせたら「呉越同舟」と冷やかしたりした。「臥薪嘗胆」や「隗より始めよ」(注2)といったこの時にうまれた言葉に慣れ親しんでいる。これは彼らが築き上げた古代出雲王国が長く影響を遺した証左かもしれない。

天皇家の祖先が呉の太伯であるという説が、江戸末期の歴史家儒家たちの論争を生み、恐れ多いとしてうやむやに消された事があるが、強いていえば呉の太伯は出雲王国につながっていたのだ。

そして最後に仕上げをしたのが黄河文明の燕の王族集団であった。彼らの統一国家再興の決意と能力が倭のバラバラ小国群を、国際的にも通用する統一国家ヤマトに作り上げたのである。その過程も持ち込んだ武力による征服ではなく、内部の諸勢力の婚姻や懐柔などの政治的統合で成し遂げたのである。歴史の偶然とは片づけられない、ある人間集団がもつ強い意志とノウハウがあった。それは幸運なことであった。国際感覚をもった統一国家が3世紀ごろにできたことは、日本列島の自主独立に大き

な出来事であった。中国や朝鮮半島で見られた相次ぐ民族の征服や王朝の転覆混乱の歴史が、初期の日本にはなくて済んだのである。王権樹立の強い意志が一方にあって、もう一方で受容力の大きな縄文人と江南文明の民がそれを良しとして協力したことがその状態をもたらした。世界的にも稀有な出来事であった。

バラバラな部族のままだったアフリカ大陸はヨーロッパの植民地にされ、インカやアステカ王国で分散していた南米が、スペインの支配に屈した悲劇が歴史の現実なのだ。

呉・越・燕の、今は名も知れず歴史の闇に消えてしまった優れた指導者たちの執念と努力にささやかな感謝を捧げたい。彼らの名は、思いがけない形で、古事記神話の神々の名として残されているはずだ。

## 7. 学会の諸説との比較

6節のまとめまで書いて、親しい諸兄に査読をお願いして、いろいろのご指摘をいただいた。その一つに朝鮮半島との関連が不足していること、またこの時代に関する学説で未読のものがあるのをご紹介していただいた。これは後追いで補足することとしたが、驚いたことに権威の方々の説いておられることは私のまとめを補強してくださるばかりで修正する必要はないことがわかった。

今から半世紀ほど前、北方騎馬民族征服説を江上波夫氏が発表して論議を巻き起こしていたことは知っていたが、珍説として消えてしまったと思っていた。冒頭でも述べたように邪馬台国の所在とともに、今だにこの時代の歴史は学会では公式な見解はなさそうだった。

今回改めてその北方騎馬民族征服説を読みなおして、実は本稿の趣旨とほとんど同じであることを知って驚いた。江上波夫氏は東大東洋史学名誉教授で、文化勲章受章者であるが、この学説は学会では否定されているのだ。

江波教授の「日本における民族の形成と国家の起源」(1965年 東洋文化研究所紀要第32)は、私の第2段階の江南の民の渡来、第3段階の北方黄河漢民族の渡来という基本線で同じ説を述べられている。第3段階の渡来は、北方騎馬民族の王族が朝鮮半島を南下し半島南部の任那で一度滞留してのち九州北部に上陸したことを詳細に検討されている。

基本的には同じであるが、違っているのは「北方黄河漢民族」をどこの集団であるかは特定されていないで、『朝鮮半島に流移してきた辰王が、弁辰の地を支配した征服王朝的性格の強い王』とされ、朝鮮半島南部に拠点を置いた時の名前辰王から話を起こしておられる。その一族を騎馬民族とし、九州上陸から倭国の征服を行ったとされておられる。しかし総論として「騎馬民族征服」説となると、かなり印象の違うことになってしまう。筋としては同じでも、私の元燕の王室の統一国家建設は征服という言葉のイメージではない。彼らはかつての燕の国を建設した時の理想と夢を、この列島で再現する夢を捨てず、策略と何よりも先住の民たちの合意で歓迎されつつ達成したとの印象を持っている。そこが違うのである。

最後に京大ご出身の日本古代史研究家の安本美典氏の見解を紹介しよう。彼は現在も「邪馬台国の会」という研究会で自説を発表し続けておられる、その代表作「大和朝廷の起源」から彼の説を紹介する。まず記紀は政治的な意味で修正は施されているが、歴史的事実を反映しているとして、文献批判学の方法で、時間尺度の政治的修正を発見して、元の事実を発見しようとされた。

その結論は、神武東征は3世紀にあった歴史的事実である。神武は九州北部にあった邪馬台国が根拠である。そして卑弥呼は天照大神である。

これら二つの学説は、このように、はからずも素人の私が数々の旅行先で考え到達した説を補強してくれたのである。

## 文献

- 1、日本人は何処から来たか 血液型遺伝子から解く 松本秀雄 NHK BOOKS 1992/10
- 2、DNA でたどる日本人 10 万年の旅 崎谷満 CCC 研究所所長 昭和堂 2008/1/30
- 3、日本人の源流 核 DNA 解析でたどる 齊藤成也 国立遺伝学研究所教授 河出書房新社 2017/11/5
- 4、古代日本のルーツ 長江文明の謎 安田善憲 青春出版社 2003/6/15
- 5、古代九州 別冊太陽 2005-8-22 平凡社
- 6、卑弥呼と宇佐王国 神話から古代への軌跡 清輔道生 彩流社 1995-12-25
- 7、渡部雅史著 大和朝廷成立の謎 古代出雲王国から邪馬台国へ 幻冬舎 2012/10/15
- 8、武光誠 渡来人とは何者だったか 河出書房新社 2016-6-20

- 9、門脇禎二 邪馬台国と地域王国 吉川弘文館 2008-6-10
- 10、安田嘉治著 倭人伝古事記の謎が解けた 新人物往来社 H4-11-30
- 11、卑弥呼以前の倭国五〇〇年 銅鐸。明刀銭、多紐鏡をめぐって 大平裕 2018-5-29  
PHP
- 12、神武天皇 VS 卑弥呼 ヤマト建国を推理する 関裕二 新潮新書 2018-4-20
- 13、三浦佑之著 古事記を読みなおす ちくま新書 2010-11
- 14、海部陽介(国立科学博物館人類史研究グループ長)著 日本人はどこから来たのか？  
文芸春秋社 2016-2-10
- 15、論集 騎馬民族征服王朝説 江上波夫大和書房 1975-3
- 16、安本美典 大和朝廷の起源 勉誠出版 2017-7
- 17、外郎売の科白 坂井清成著 三恵出版 昭和 55 年 8 月 p 13

(注 1) 32 億からなる DNA 配列の 99.9%はホモサピエンスとして共通であるが、0.1% 400 万個は個性があり、その配列場所を SNP と呼んでいる。その部分を取り出して分類し比較するのである。この方法から導かれる結論はデータが膨大過ぎるためだろう、前節の Y 染色体ハプロ分析のような単純明快な答えは出せない。

(注 2) 隗より始めよ

「戦国策・燕策・昭王」によると、戦国時代、燕の昭王は天下の人材を集めようと思いつき、その方法を有能の士である郭隗に尋ねました。郭隗は「今、王、誠に士を致さんと欲せば、先ず隗より始めよ」つまり「今から、王がほんとうに天下の人材を集めたいと考えるなら、この私、隗から採用してスタートしなさい」と言ったと言います。「自分のように凡庸な失敗の多い人物でも採用されるなら、私以上の人は進んで応募するでしょう」と述べたかったのでしょうか。

かくして王は郭隗を採用し、その果敢な決定を知った天下の人材が、昭王君のもとに、こぞって集まったといえます。自己推薦した郭隗もなかなかの人物だったといえます。現在では一般に「隗」を自分のことと受け取り、「自分が先ず率先する」というように使っている場合も見えます。

(注 3) 宇佐を含めて今は豊前豊後と分かれているが古代は豊の国で一つだった。その中央にみやこ町がある。いまの京都が平安京となりみやこと呼ばれるよりずっと古い時代から、「京都郡みやこ」と名乗っていた町である。おそらく邪馬台国時代にさかのぼるのではないだろうか。このみやこ町歴史資料博物館があり、弥生時代各地に王国ができ、その中心地であったためにこの名前が付いたとあった。

(注4)

編纂 1300 年を迎えた古事記の神話について「なぜ天の子でなく、孫なのか？」と題する一文があった。<http://www.kankou-shimane.com/shinwa/kiso/index.html>

「このとき、ニニギが降臨した地は日向（宮崎県）の高千穂とされます。オオクニヌシが国を譲った場所が出雲であるにもかかわらず、ニニギはなぜ日向に降りたのでしょうか。さらに、最初はアメノオシホミミが天降る予定であったのが、直前になって子のニニギ（アマテラスの孫）に代わったのはなぜか。そこも見逃せない謎ですが、この点については、七世紀後半に即位した持統天皇とのかかわりが指摘されています。

持統天皇は夫の天武天皇が崩御したのち、皇后の立場で政治を執ったものの、皇子の草壁皇子（くさかべのみこ）が亡くなったため、自らが天皇に即位しました。その後、草壁皇子の子、すなわち持統天皇の孫にあたる文武天皇に譲位したのです。ここには、祖母から孫への継承という関係が読み取られ、「アマテラス→ニニギ」の天孫降臨神話と同じパターンを見ることができます。

天孫降臨神話の原型は七世紀後半に生まれた！

持統天皇にとって、我が子の草壁皇子が亡くなったあと、自分と天武天皇の血統を受けつぐ文武天皇を即位させることは最大の願いでした。持統から文武への皇位継承を正統化し、保証するための大きな拠り所として形成されたのが、アマテラスを天孫降臨の司令神とし、孫のニニギがその命を受けて天降るという「天孫降臨神話」に他なりません。天孫降臨神話の歴史的背景をこのように読み取るならば、この神話の成立も持統天皇の時代と考えることができます。つまり、天孫降臨神話が形づくられたのは七世紀後半の段階ということになります。記・紀神話を形成する個々の神話がいつごろ、どのようにして形成されたかについては、なかなか知ることが難しいものです。その意味でも天孫降臨神話は、成立の事情が推測することのできる貴重な神話といえます。

別添 魏志倭人伝原文と現代文訳（ウイキペディアより）

行程について

原文	日本語訳
倭人在帶方東南大海之中、依山島爲國邑。舊百餘國、漢時有朝見者。今使譯所通三十國。	倭人は帯方郡の東南の大海の中に在り、山島に依って国邑とし、もとは百余国で、漢の頃から大陸への朝貢があり、記述の時点では 30 箇国が使者を通わせている。
從郡至倭、循海岸水行、歷韓國、乍南乍東、到其北岸狗邪韓國、七千餘里。	帯方郡から倭国に至るには、水行で海岸を循って韓国を経て南へ、東へ、7000 余里で〔倭の〕北岸の狗邪韓国（こやかんこく）に到着する。
始度一海千餘里、至對馬國、其大官曰卑狗、副曰卑奴母離、所居絶島、方可四百餘里。土地山險、多深林、道路如禽鹿徑。有千餘戸。無良田、食海物自活、乘船南北市糶。	始めて海を 1000 余里渡ると、對馬国に至る。大官は卑狗（ひこ）、副官は卑奴母離（ひなもり）。絶島で 400 余里四方の広さ。1000 余戸が有る。山は険しく、道は獣道のように、林は深く、良い田畑がなく、海産物で自活。船で南北岸の市へいく。
又南渡一海千餘里、名曰瀚海、至一大國。官亦曰卑狗、副曰卑奴母離。方可三百里。多竹木叢林。有三千許家。差有田地、耕田猶不足食、亦南北市糶。	また南に瀚海と呼ばれる海を 1000 余里渡ると一大国に至る。官は對馬国と同じ。300 余里四方。竹、木、草むら、林が多い。3000 許りの家が有る。田畑は有るが田を耕すが食糧には足りず、南北から市へいく。
又渡一海千餘里、至末廬國。有四千餘戸、濱山海居。草木茂盛、行不見前人。好捕魚鮓、水無深淺、皆沈没取之。	また海を 1000 余里渡ると、末廬国に至る。4000 余戸が有り、山海に沿って住む。草木が茂り、前を行く人が見えない。魚やアワビを捕るのを好み、皆が潜る。
東南陸行五百里、到伊都國。官曰爾支、副曰泄謨觚・柄渠觚。有千餘戸。世有王、皆統屬女王國。郡使往來常所駐。	東南に陸行し、500 里で伊都国に到着する。長官は爾支（にき）、副官は泄謨觚（せもこ）と柄渠觚（へくこ）。1000 余戸が有る。世、王が居た。

	皆、女王国に属する。帯方郡の使者の往来では常に駐在する所。
東南至奴國百里。官曰兕馬觚、副曰卑奴母離。有二萬餘戸。	東南に 100 里進むと <b>奴国</b> に至る。長官は兕馬觚（しまこ）、副官は卑奴母離（ひなもり）。2 万余戸が有る。
東行至不彌國百里。官曰多模、副曰卑奴母離。有千餘家。	東へ 100 里行くと、 <b>不弥国</b> に至る。長官は多模（たも）、副官は卑奴母離（ひなもり）。1000 余の家族が有る。
南至投馬國、水行二十日。官曰彌彌、副曰彌彌那利。可五萬餘戸。	南へ水行 20 日で、 <b>投馬国</b> に至る。長官は彌彌（みみ）、副官は彌彌那利（みみなり）である。推計 5 万戸余。
南至邪馬壹國、女王之所都、水行十日、陸行一月。官有伊支馬、次曰彌馬升、次曰彌馬獲支、次曰奴佳鞮。可七萬餘戸。	南に水行 10 日と陸行 1 月で女王の都のある邪馬台国に至る。官に伊支馬（いきま）、弥馬升（みましょう）、弥馬獲支（みまかくき）、奴佳鞮（なかてい）があり、推計 7 万余戸。

## 国々の関係

原文	日本語訳
<p>自女王國以北、其戸數道里可得略載、其餘旁國遠絶、不可得詳。          次有斯馬國、次有已百支國、次有伊邪國、次有都支國、次有彌奴國、次有好古都國、次有不呼國、次有姐奴國、次有對蘇國、次有蘇奴國、次有呼邑國、次有華奴蘇奴國、次有鬼國、次有爲吾國、次有鬼奴國、次有邪馬國、次有躬臣國、次有巴利國、次有支惟國、次有烏奴國、次有奴國。          此女王境界所盡。</p>	<p>女王国の以北は、其の戸数・道里を略載することが可能だが、其の他の傍国は遠く絶（へだ）たっていて、詳（つまびらか）に得ることができない。斯馬国、己百支国、伊邪国、都支国、彌奴国、好古都国、不呼国、姐奴国、對蘇国、蘇奴国、呼邑国、華奴蘇奴国、鬼国、爲吾国、鬼奴国、邪馬国、躬臣国、巴利国、支惟国、烏奴国、奴国。これが女王の境界が尽きる所である。</p>

其南有狗奴國。男子爲王、其官有狗古智卑狗。不屬女王。	其の南には狗奴国がある。男子を王と爲し、其の官に狗古智卑狗（くこちひく）が有る。女王に属せず。
自郡至女王國、萬二千餘里。	帯方郡から女王国に至る、1万2000余里である。

## 倭国の様子

原文	日本語訳
男子無大小、皆黥面文身。	男性は大人も子供も、みな顔や体に入墨をしている。（黥面は顔の入れ墨、文身は体の入れ墨）
自古以來、其使詣中國、皆自稱大夫。	古くから、中国に来た倭の使者はみんな自らを大夫と称している。
夏后少康之子、封於會稽、斷髮文身、以避蛟龍之害。今倭水人好沈没捕魚蛤、文身亦以厭大魚水禽、後稍以爲飾。	夏（中国の王朝）の王の少康の子が、會稽に封ぜられた時、断髪して入墨をし、蛟（みずち）の害を避けたという。今、倭の漁師も好んで水にもぐって魚や蛤を捕り、身体に入墨をして大魚や水禽を避けていたが、後には飾りになった。
諸國文身各異、或左或右、或大或小、尊卑有差。	入墨は国ごとに異なり、あるいは左に右に、あるいは大に小に、階級によって差が有る。
計其道里、當在會稽東冶之東。	その（倭国の）位置を計ってみると、ちょうど會稽や東冶の東にある。
其風俗不淫。男子皆露紒、以木縣頭。其衣橫幅、但結束相連、略無縫。婦人被髮屈紒、作衣如單被、穿其中央、貫頭衣之。	その風俗は淫らではない。男子は皆鬘を露わにし、木綿の布を頭に巻いている。その衣服は幅広い布を結び合わせているだけであり、ほとんど縫われていない。婦人は髪に被り物をし後ろで束ねており、衣服は単衣（一重）のように作られ、中央に孔をあけ、貫頭衣である。
種禾稻・紵麻、蠶桑緝績、出細紵・縑・縣。	稲、紵麻（からむし）を植えている。桑と蚕を育てており、糸を紡いで上質の絹織物を作っている。

其地無牛馬虎豹羊鵠。	牛・馬・虎・豹・羊・鵠（かささぎ）はいない。
兵用矛・楯・木弓。木弓短下長上、竹箭或鐵鏃或骨鏃。所有無與儋耳・朱崖同。	兵器は矛・盾・木弓を用いる。木弓は下が短く、上が長くなっている。矢は竹であり、矢先には鉄や骨の鏃（やじり）が付いている。
倭地温暖、冬夏食生菜、皆徒跣。	土地は温暖で、冬夏も生野菜を食べている。みな、裸足である。
有屋室、父母兄弟臥息異處。以朱丹塗其身體、如中國用粉也。食飲用籩豆、手食。	家屋があり、寝床は父母兄弟は別である。身体に朱丹を塗っており、あたかも中国で用いる白粉のようである。飲食は高坏（たかつき）を用いて、手づかみで食べる。
其死、有棺無槨、封土作冢。始死停喪十餘日。當時不食肉、喪主哭泣、他人就歌舞飲酒。已葬、舉家詣水中澡浴、以如練沐。	人が死ぬと、棺はあるが槨のない土で封じた塚を作る。死してから10日あまりもがり（喪）し、その間は肉を食さない。喪主は哭泣し、他の人々は飲酒して歌舞する。埋葬が終わると家の者は水に入り体を清める、これは練沐の如し。
其行來渡海詣中國、恒使一人、不梳頭、不去蟣蝨、衣服垢汚、不食肉、不近婦人、如喪人。名之爲持衰。若行者吉善、共顧其生口財物。若有疾病、遭暴害、便欲殺之、謂其持衰不謹。	倭の者が中国に詣るのに海を渡る時は、いつも一人が選ばれ、頭（髪）をとかず、虱を取らず、服は汚れ放題、肉は食わず、婦人を近づけず、喪人のごとく。名づけて持衰（じさい）という。もし行く者が善ければ生口や財物が得られる。もし病気があったり暴害にあえば、その持衰が謹まなかったからだとして殺される。
出真珠・青玉。其山有丹、其木有柁・杼・櫛樟・榑・櫛・投櫃・烏號・楓香、其竹籐・籐・桃支。有薑・橘・椒・藜荷、不知以爲滋味。有獼猴・黒雉。	真珠と青玉が産出する。倭の山には丹があり、倭の木には柁（タブノキ）、杼（ドングリ）、櫛樟（クスノキ）、榑（ボケ）、櫛（クヌギ）、投櫃（カシ）、烏号（クワ）、楓香（カエデ）。竹は籐（じょう）、籐（かん）、桃支（とうし）がある。薑（シヨウガ）、橘（タチバナ）、椒（サンショウ）、藜荷（ミヨウガ）があるが、美味しいのを知らない。また、猿、雉（きじ）もいる。

其俗舉事行來、有所云爲、輒灼骨而卜、以占吉凶。先告所卜、其辭如令龜法、視火坼占兆。	特別なことをするときには骨を焼き、割れ目を見て吉凶を占うト（ぼく）を行う。まず占うところを告げ、その解釈は令龜の法のように、火で焼けて出来る割れ目を見て、兆しを占う。
其會同坐起、父子男女無別。人性嗜酒。見大人所敬、但搏手以當脆拜。其人壽考、或百年、或八九十年。	集会での振る舞いには、父子・男女の区別がない。人々は酒が好きである。敬意を示す作法は、拍手を打って、うづくまり、拝む。人は長命であり、百歳や九十、八十歳の者もいる。
其俗、國大人皆四五婦、下戸或二三婦。	身分の高い者は4、5人の妻を持ち、身分の低い者でも2、3人の妻を持つものがある。
婦人不淫、不妒忌。	女は慎み深く嫉妬しない。
不盜竊、少諍訟。	盗みはなく、争論も少ない。
其犯法、輕者没其妻子、重者滅其門戸及宗族。	法を犯す者は軽い者は妻子を没収し、重い者は一族を根絶やしにする。
尊卑各有差序、足相臣服。	宗族には尊卑の序列があり、上のもののいいつけはよく守られる。

## 交流年表

原文	日本語訳
景初二年六月 倭女王遣大夫難升米等詣郡 求詣天子朝獻 太守劉夏遣吏將送詣京都	景初2年（西暦238年）6月 倭の女王は大夫の難升米等を（帯方）郡に詣いるよう遣わし、天子に朝獻を求める。太守の劉夏は吏將をつけて京都（魏の都）に送った。
其年十二月 詔書報倭女王曰（中略）	その年の12月、倭の女王に報いる詔書が出された。曰く（中略）
正始元年 太守弓遵遣建中校尉梯儁等 奉詔書印綬詣倭國 拜假倭王 并齎詔賜金帛 錦	正始元年（西暦240年）、太守の弓遵が中校尉の梯儁らを遣わし、倭國に詣りて詔書・印綬を奉じ倭王に拜假した。また、金帛・錦・罽・刀・鏡・采物をもたらした。倭王は謝恩の上表文を詔した。

<p>鬪 刀 鏡 采物 倭王因使 上表答謝恩詔</p>	
<p>其四年 倭王復遣使大夫伊聲 耆 掖邪狗等八人 上獻生口 倭錦 絳青縑 縣衣 帛布 丹木 拊 短弓矢 掖邪狗等 壹拜率善中郎將印綬</p>	<p>その4年、倭王はまた大夫の伊聲耆・掖邪狗たち8人を遣わし、生口・倭錦・絳青縑・縣衣・帛布・丹木・拊（搏拊）・短弓矢を獻じた。掖邪狗たちは善中郎將の印綬をさずかった。</p>
<p>其六年 詔賜倭難升米黃幢 付郡假授</p>	<p>その6年、倭の難升米に黃幢を賜えと、郡に假授するよう詔が出された。</p>
<p>其八年 太守王頌到官 倭女 王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓 呼素不和 遣倭載斯 烏越等 詣郡 說相攻撃狀 遣塞曹掾 史張政等 因齎詔書 黃幢 拜假難升米 爲檄告諭之 卑 彌呼以死 大作冢 徑百餘步 狗葬者奴碑百餘人 更立男王 國中不服 更相誅殺 當時殺 千餘人 復立卑彌呼宗女壹與 年十三爲王 國中遂定 政等 以檄告諭壹與 壹與遣倭大夫 率善中郎將掖邪狗等二十人 送政等還 因詣臺 獻上男女 生口三十人 貢白珠五千孔 青大句珠二枚 異文雜錦二十 匹</p>	<p>その8年、太守に王頌が到官。倭の女王の卑彌呼と狗奴國の男王の卑彌弓呼は元より不和で、倭は載斯・烏越たちを郡に遣わし、互いに攻撃している状態を説明した。塞曹掾史の張政たちを遣わし、詔書と黃幢を難升米に拜假し、告諭しこれを檄した（木札に書いた）。卑彌呼は死んでおり、塚が大いに作られ径100歩ほど、狗葬者は奴碑100人ほど。つぎに男王が立つが國中が従わず、互いに殺し合い当時1000人くらい殺された。その後また卑彌呼の宗女の壹與という13歳の者が王になり、國中がついに定まった。そういう訳で政（張政）たちは壹與に告諭し檄したのである。壹與は倭の大夫の率善中郎將の掖邪狗たち20人を遣わし、政（張政）たちが還るのを送るとともに、臺（魏の都）に詣り、男女生口30人、貢白珠5000孔、青大句珠2枚、異文雜錦20匹を獻上した。</p>